

日光道中畧記

八

和書門類			
二	八	四	五
冊	函	冊	號
一	一	一	一
冊	架	函	號

內閣文庫		和書	
三	四	五	二
函	冊	冊	號
一	一	一	一
架	冊	冊	號

內閣文庫	
番號	和 28452
冊數	11 (11)
函號	177 1017



日先道中家記卷之八

新野大佛新野山寺山光山神高

大佛新野

江戶より西へ二里許り新野大佛あり先道神高

新野大佛新野山寺山光山神高

の多き故に其後の同食ありて推して如く

新野大佛新野山寺山光山神高

新野大佛

新野大佛新野山寺山光山神高

新野大佛新野山寺山光山神高

日光道中畧記卷之八

起于大澤新田止于日光山神橋

大澤新田

野州河内郡

江戸より三拾二里拾五町貳拾間日光御神領開

發の年代詳ありしと正保元祿の國圖小新田

の名と載さるゝ其後の開發あり事推して知るべ

し往還の中央より左ハ水無村あり

千手院 右

當山派修驗江戸青山鳳閣寺の末日光蓮花石

町明學院觸下本尊不動と安重氏境内の神

明治十五年十月

明宮あり石段あり社を作す

新田塚 右

枚並木のうち堤上より大沢新田大室村水
無村三村入會の場あり

水無村

江戸より三拾部里拾五町二十間今市宿如来寺
頗往古の領主開墾の年代詳かり村名の起
りハむろり名主清玄傳り宅地ハ古木の梨樹
あり圍き大坪其美甘美ハ水氣多し
土人水梨と呼びし村名も水梨村と唱へ

とふおつりあり祝ありも梨樹も文化四年居宅
類焼のり紙餘燭より進り枯あり古き記録との
火よりの古事記あり村名の文字もいつのころ
改えしや正保の国圖ハハハハハ水無ハ作まり村居
の内往還の中央と限り右ハ大澤新田あり

地藏堂 左

延命地藏を安置し村民持

稻荷社 右

千手院 持

金比羅社 左

村民持社ハ石少ク造事

高尾権現社 左

神主數馬持 稻荷秋葉氏末社ト云

愛宕社 左

神主數馬持

森友村

江戸より三拾三里三町廿間日光淨神領寛永
の以テ板橋將監々米地ありむつりあり村内小
七本橋ト稱スル所々あり將監此地を領せり
此の樹下あり重罪のものを刑せり故汗織の

地ありと云々後來の陰地と云々榎樹ハ遠く枯レ今

ハ其二株のミヅコキ

志々あり 左

往還より女一隔きり春末ハ志々め花匂きり

方三町四のあひま紅繩と云々

稻荷社 左

神明社 左

村民持

来迎寺 右

浄土宗今市宿如来寺の末盛朝山光明院ト

号以本尊弥勒ハ惠心の作なり。近き以火災
の上以焼失せり。當寺ハ大同元年の起立なり。
以古き記録も存せりハ詳あり。以境内ハ藥
師堂あり。これも惠心の作なりといふ。

縮荷二社 右

村民持

藥王院 右

當山派修驗日光蓮花石町明學院の配下本
尊不動と安置し

瀧尾権現社 右

村の徳寺なり。修驗藥王院持

一里塚

日本橋より三拾三里

七本櫻 右

堤上よりありむうハ七本あり。ハ年曆を録るまう
小枯木とあり。今ハ二株のみ残まり。此木を根より
ハ每森友村ハ河内郡今市篇より日光のり。ハ
都賀郡ハ属す。

今市篇 都賀郡

江戸より三拾四里三町二十間大澤篇より。都里

日光の方津石宿に五里壬生通板橋宿に五里倉
 津通大栗村に五里拾六町拾四間白川通大渡
 村に五里三拾五町日光津神領往古の領主ハ評
 判にされども板橋將監の采地の内ありしと云傳ふ元
 和年中津徳座の後御神成となふ開闢の年代
 詳かりぬむしハ今村といひ一紙宿駅となす近江
 の民移住し次第ハ賑いし市場となりしと云今市
 宿に改元毎月一六の日を市の定日としし諸邑紙
 賣買を地子免許ハ五町三反八畝あり人足
 廿五人駄馬廿五疋を置き継立のし紙役紙宿内

の民覺左邊の六右邊のふる者ハ古来より諸役免許
 あり其所以ハ寛永十五年慈眼大師當所を通
 行の時俄ハ暴雨降来りし覺左邊の祖筑後意
 六右邊の祖伊勢翁の兩人各具を調進せしにうり感
 賞しし諸役免許の状を大師と申與らまはし
 て今覺左邊のうり家ハ藏せり

饗文

上張り各具ハ掛け働
 供奉しし而し依感稱

法後以下教免致
者也

寛永中又氏寅年

十月十六日 刊

伊勢翁
撰

伊勢翁ハシク安西伊勢ノ号ニテ法後ニ思ハ大橋

石見ノ山後ニ法後ト改ム又箱内ノ民治五右衛門ノ其ノ
秘藏モ亦ノ靈佛アリ燈籠佛ト名ツク諸人願望ノ
トアリ時世佛解トアリ或ハ重ク或ハ輕ク
アリト是ノ成否ト示ス

和尚塚 左

或云云ハ一經文ヲ埋メテ其上ニ築キ一塚アリ
ハ經塚ナリト又云往昔八幡太郎義家奥州征伐
ノ以テ此地ニ經歷セテ故奥州塚ト名付テ一モリ下
詳アリト云傳ハ

石地藏 左

壬生街道の道分より長六尺往古大谷川洪水流
るとき流連未幾しと此より後小寺に至り日光舎
満の親地藏あり享保年中より日光 御糸指の
とき 御目障ありとて圍置しり
有徳院殿 御糸指のとき當宿入口小大あり石地
藏ありしときかきし聞しありし御尋ねあり其後ハ
平常の海あり屏藏せしとす

壬生道 左

此道より壬生城下を經て日光道中小山宿(遠江又
此道より榎木宿金崎宿のより)通る街道は例幣

使道より

玄樹院 右

淨土宗宿内如来寺の末佛頂山と号し本尊如意
輪觀音を別殿に置り境内に稲荷天神の小祠
あり

人參畑 左

作人傳左邊門額あり享保十四年彼祖傳在り
小 命ありし朝鮮種人參三根を額者とし
年々培養し今小庵せり安永年中日光より還
御のとき 上邊ありしとす

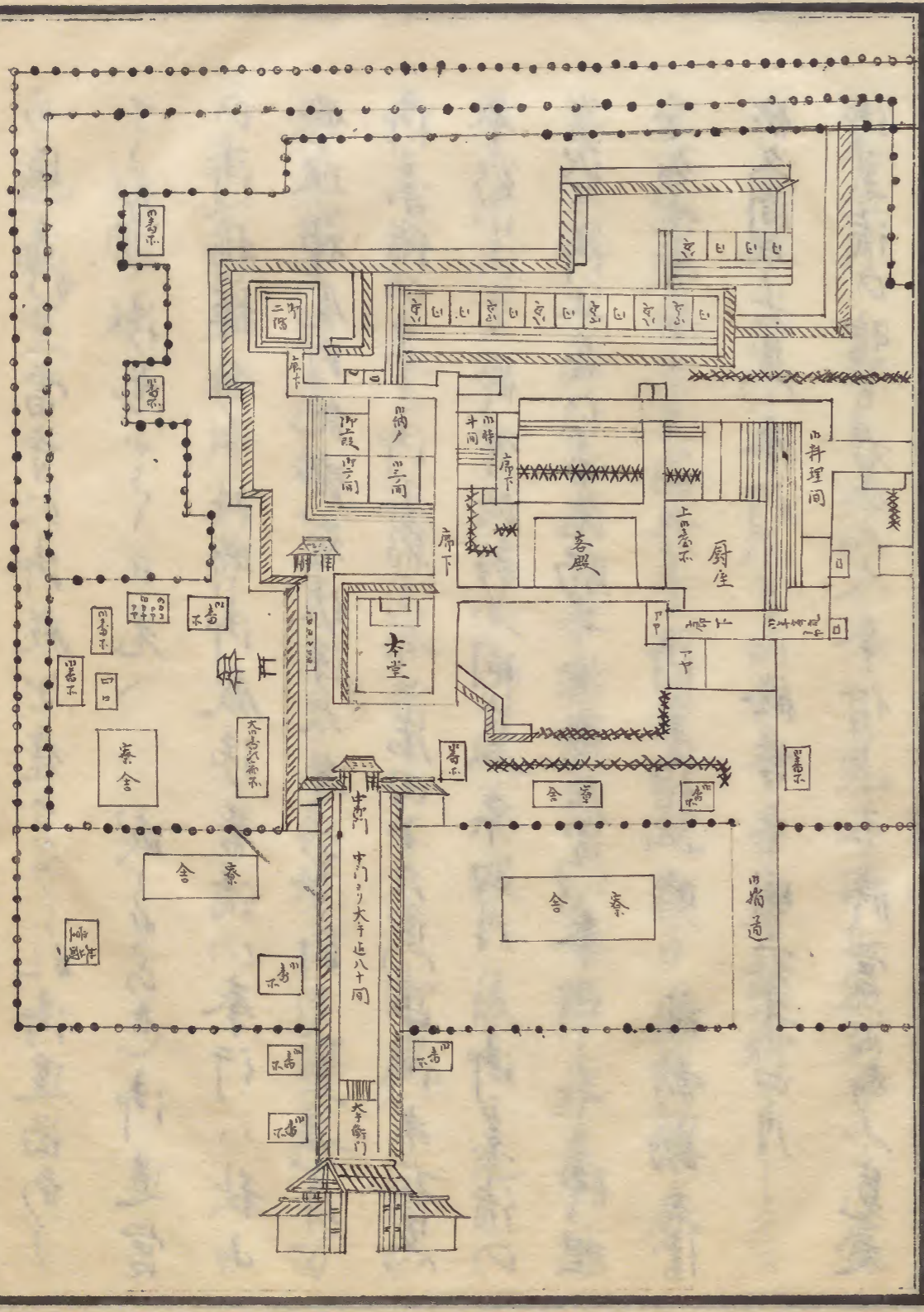
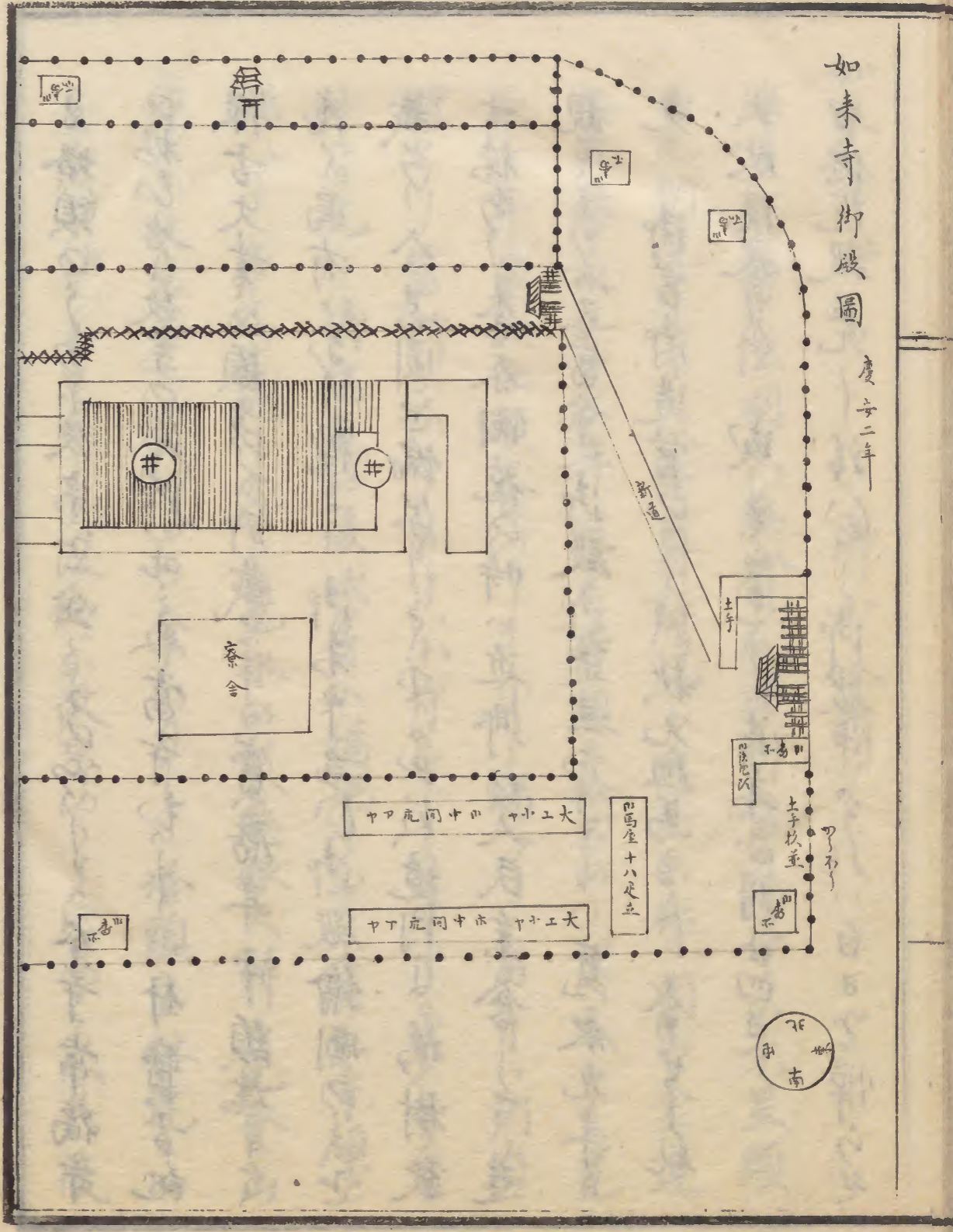
如来寺 右

浄小休所

浄土宗常陸國久慈郡瓜連村常福寺の末星顯
山光明院より以本尊弥勒ハ惠心の作開山金蓮
社號譽永正十三年寂も寺領三拾石の 浄朱平ハ寛
永十年第八世頓譽のときより賜へり當寺ハ開山の
時より當所よりいれり小寺ありて寺中も少あるを
いり日光 浄法座の後次第小福地より其上寺領を
賜いりいれ大地より寛永の以慈眼大師日光登山
のとき改宗せりいれ子の命ありりり塔頭宝林院より
いれり改宗せりいれは終り改宗のいれり及り其後

も塔頭のいれり改宗せりいれり本寺常福寺
のいれり改宗の沙汰ハ止りぬ當寺むりりハ什寶古記
祿古文書の類多く所藏せりり寶曆年中額焼りり
悉く烏有りりり僅よ 浄朱平及び浄殿繪圖のいれり
藏せり今其圖と編寫りりりりり境内よ楊樹數
十株ありり季春開花の時ハ近郷の人民余命りり遊
觀りりり又當寺ハ浄殿浄造立りりりり寛永九年日
光 浄宮浄造營のいれり秋元但馬守よ 命せりり
大猷院殿りり 成りりりり其年正月廿四日
台徳院殿焼りりりり浄殿中より白日を憚らせ

如来寺御殿圖 慶安二年



らゆゑに法寺當寺に御殿を建させし御逗留あり
て、夜に御恐おしく日光へ 成せり是御造営
の御指揮あり此時御殿御普請の奉行ハ秋山
修理神尾内記齋後佐源太等あり同十一年九月
御系譜のとき御止宿あり 庄田小左衛門中川半左衛門
奉行しつゝ修造成加ふ同十三年四月 御系譜の
とき御止宿のとき先駒井次郎左衛門奉行しつゝ修理
を加ふ慶安元年四月 御系譜のとき諏訪勘玄侍
佐久間守右衛門奉行しつゝ修造成同二年四月
御系譜のとき右の二人奉行しつゝ修造成を加ふ寛文

三年四月 御系譜のとき日光小御止宿ありし當
寺御殿ハ入しつゝれも同四年寺普請料しつゝ
金百兩を賜ふ同五年四月御殿後ら及住僧廓
譽よ賜しつゝのとき酒井雅樂頭ありし寺社奉行
井上河内も 余氏傳ふ御殿廢毀の後も日光
御系譜の度しつゝ御小休所となりし御殿二階の
跡此地に御床机を造らせしつゝお境内の坪敷を万
三千七百五拾坪あり

八幡社
地藏堂

辨財天祠

観音堂

二字

星宮

稻荷社

山神社

境内より

塔頭

寶林院

壽仙院

聖衆院

地藏院

市神祠

宿内往還の中より此あり事代主命と祭まつり祢宜

周防持

弥勒寺

當山派修驗醍醐三空院の末日光明學院配下明慶山

密藏院より号し本尊不動を安置し

金性院

當山派修驗弥勒寺小同

淨泉寺 右

淨土宗宿内如來寺の末瑠璃光山清光院より号し

本尊藥師と慈覺大師の作日光月光十二神八蓮

慶の作當寺ハ元龜三年の紀立ありて、割山を清光院慶譽嚴長と云慶長元年寂兵什寶古記等ハ天明二年火災の事ありと云

藥師堂

天神社

辨財天祠

右境内小あり

日光御米藏五

寶曆年前の造立あり四棟より石垣より屋

と云

瀧尾権現社左

宿の徳より稱宜菊地周防の持祭神ハ田心姫

今當社ハ日光山瀧尾の神と同稱あり

日光三社ハ男體山女辨山太郎山

瀧尾の神ハ即ち三社の一ハ一ハ女體中言あり 性古此神妙地ニ神遊いあり

一ハ一ハ當社を勧請せしと云其年代を傳ふる社

地東西九拾間餘南北百百餘古板鬱茂一其梢

頭枝より分列裂しと云叙股のしと云名は多て并の

森と云又當社の背後小琵琶窪といふ地あり其

形ち琵琶小似あり神護景雲元年勝道上人より

りて日光登山のしきま川此琵琶窪と依りて云

瀧尾権現出現ありて、奇瑞示さる時、小天より并降りて、并の森と名つありて、い傳ふ末社十基

天照太神宮

正八幡社

磯部太神宮

七串大明神社

宇佐八幡社

雷神社

金比羅社

二渡権現社

稲荷社

愛宕社

以上本社の旁あり

高麗大明神社右

瀧川村の鎮守ありて、天正年中の勸清あり、称宜手塚主税持社地、稲荷の小祠あり

一里塚

日本橋より三拾四里

瀧川村

江戸より三拾四里拾九町二拾間日光御神領往
古の領主詳かゞ元和三年日光 清徳座の後
御神領となり山口新左衛門支配となり今日日光奉
行の支配となり家むつゝ民家往還あり幸町許東小
つりしつ 御鎮座の後街道の左右に移り此所土地
より子伝わりて上瀬川と号し元の村居を下瀬川と呼
ひ其北を北瀬川と稱し毎三名あつて是れ此村か人も人
参畑あり又往昔より三月二日日光三社権現の祭り
とて當村より遠矢の式を行ひしつ今ハ廢しつ神
酒の之儀供をとりし

月藏寺 左

泉村の内にはあり天台宗日光山妙道院の末泉瀧山實教
院と号し本尊弥勒ハ行基の作り當寺ハ日光
御系詣のしつ井伊掃部頭本陣と定む

稻荷社

疱瘡神社

薬師堂

境内より

愛宕社 左

同村の内山上より村の徳をとり泉瀧石と名付し

奇石社辺あり

城山左

同村のうしろあり隠波の平と唄ふ高さ百間許由未詳
あり土人の傳ふ松平隠岐守の墨跡あり

人參畑左

村の中程あり作人周次歌り

長禪寺左

天台宗江戸浅草正徳院の末法性山金剛院と号し本
尊金剛界大日の像を安置し行基の作あり

疱瘡神

稲荷社

不動堂

大日堂

境内より

牛頭天王社右

長禪寺持

雷神社左

虚空藏堂左

泉村より何處も月藏寺の持あり

五位権現社左

同村小あり村民持三社もに村の結者と云

野口村

江戸より三拾四里廿三町或拾間日光御神領往古の領主詳
多し御神領ありしとき御神跡願わく寛文の頃より
山口新九郎の支配あり寛政三年より日光奉行の支配
とある間獲の奉代定りしにむし生圀の地より西北の
方人家あり曠野ありしを當村ハ野の入口なり汝れ野
口と名付しよふ當村の民家あり古往還の方より
水損の後新道の左右小居を移せり野口新田も
買ありしあり又村民市三郎ありの宅地ハ大木乃

梅ありと呼そ三郎梅といふ事ありの大木ハ枯る今
ハ少くもえなれも圍ハ五尺餘あり桜花の以ハ往來の
貴賤立ちたりありむの多し

愛宕社 右

瀬尾村の内あり村民持

龍藏寺 右

天台宗江戸淺草正徳院の末雲青山より本寺薬
師ハ春日の作りしと云別々堂以作りて古きを安永後

道祖神 右

龍藏寺持

古往還 右

日光街道むろろ此道より七里村筋違橋のより通く
て今の街道の東よりむろろ延寶年前大谷川供水の
時民家流失し道路損壞せしは西のより新し街道
むろろむろろ往還より古道水損の年代は慶安年中並
木の板植立りむろろ間ありむろろむろろ古道より
むろろ板今新道より植つむろろ板むろろの大き相似むろろ土
人の傳説小塊むろろ寛文二年稲荷川出水のとき古道
損敗むろろむろろ日光 浄糸詣の時ハ古道を以て
浄供方の廻り道より又其入口小七里村筋違番のより

番所むろろむろろむろろ舊例あり

稲荷社 左

瀧尾社 左

稲荷社 左

星宮 左

以上四社より小村民持

人參畑 左

作人庄むろろ

山神祠 左

村民持

生岡山王社 左

山上より祭神ハ伊弉册尊本地十一面觀音當村
及び所野村小百村瀬尾村瀬川村和泉村平ヶ
崎村吉澤村八ヶ村の惣鎮守なり當社ハ嘉祥元年
慈覺大師東國往獲りて免生岡大日堂の東小山王に
勸請せしむ日光山山王七社の一なり昔よりハ毎年十一月
十日大日堂の法事終てのち此神前よりハ講の修行
あり中古より此事廢し而衆徒三人三向一答の論義の
ありしより美應年中より此式を廢せしむ一坊堂
衆ハ今も出仕せしむ往古ハ山王の社僧二十一坊社の南にあり

て社役を勤めありし故ありて日光山より被却せし
あり古記ハ見えありし今も村民友藏庄兵衛の兩
人稱真なりて是誠なり當社修營ありて正遷宮の
よりハ修學院友市別當御本坊苗守居の荒後及び衆
徒十二人一坊十人社家廿人樂人十人神人廿人出仕せし
事舊例あり

日光権現社 左

山王の末社なり

生岡大日堂 左

七里村の惣鎮守なり別當澤左京當社多弘仁十一

年九月一日弘法大師登山のとき此園ハ神出生の地あり
小より大師より大日遍照の像を彫刻し堂に作
てしれを安置も當社の縁起及び古棟札の遺も龕
中ハ秘藏しし浪よ人か志ありしと云祭礼ハ正月十月の
兩度あり正月ハ七日八日の五日日光津河主より供米神
酒燈明等と供せし一坊四人奉りし當山牛玉押初
より祈禱加持と修立十月十日は祭日と定む先年
より祭禮の時村内の者並馬ふのり経殿をめぐり式
あり一人を神役と唱へ一人を合力と名づく各竹を
作し馬に鈴をかつ事清腹より奉りし形をありし

免る此より別當芋のふりし塩をばりし
しきの案内いしし諸人小食せしむられ中古
の仕奉りありしよりし祭事おれし傳聞のまじ
記し

辨財天堂

社地小より傍に十五童子の像を安置

七里村

江戸より三拾五里並拾町二十間日光津神領事ハ前村
小同し村名の起りハ往昔神護景雲元年勝道大
日光山を初より時生園の地より一七日の間護

摩修行ありて登山せし道一の生国あり日光山山麓
橋神橋ありて道程九々四十二町あり六町を一里とせり
時ハ七里ありてふりて七里村と名付く村内日光
街道ありて古往還と唱ふる筋違橋の降ふる路あり
野口村の古往還一通一多今の街道の東より一
寛文の以洪水のとき民家流亡一道路も損敗し
通行ありて西の方山脚へ往還と記する人民
之後りてふりて上七里と唱ふる新田ありて是を
新と移居せり地ありて七里新田と記す一其の
姓ありてふりて又村内小田家長兵衛ありてあり

勝道上人始て日光山よ分乃んとて大谷川の辺より、
いりて水勢をけりて渡りてふりての岸に
たゞいりて深砂大王出現あり青赤の二蛇と放
ち橋ありて上人を渡す此時上人私人小命一山菅
を刈らて蛇舞のうらふけり大谷川を渡らる長兵衛と
私人の子孫ありて一山崎太夫といふ今も神橋掛
替のときハ神秘の式を命せり銀子紙下一玉上人
ハ目一多橋掛長兵衛といふ百年己前大災ありて
て記載を失ありて由緒詳ありて三人扶持米
五石三斗ハ代々賜りて 浄宮社家の支配あり

泉光寺 右

天台宗日光妙道院の末松壽山と号し本尊弥勒
傍に不動地藏の二像あり

岩下橋

明神川より架き板橋長廿間幅九尺

尾立岩 左

むらゝ日光の神宇都宮に遷りてより蛇躰小現し
大谷川を渡り此岩の上より赤い尾を空中に立ち東
を指し進み宇都宮の丸山小とあり郡主奇異の
ありいといふ丸山は一社を建て大明神と崇り此山

と尾立岩と名づく岩下の泉清浅ありて掬飲せし

明神川 左

川幅を丈餘尾立岩の下より湧出て瀧川小會

此流水むらゝ野口村より街道の西小わたり

思ふに赤堀と唱へ瀧川村泉村の境を流る大堀と唱

へ下流今市宿より石那田村小いあり上楮倉村の流水

は會へ大網村に入り末々田川とあり宇都宮に

経て中徳園結城の上より絹川小落明神川と名付

しむらゝ日光の本宮権現宇都宮に遷りてより

蛇躰小化して生園の岩上小至りてより宇都宮

尾立岩圖



赤財天

庚申

地藏

明神

まきとらりれ一道自然小るれ川とゆる其は毎大蛇の
うねりふか舞ふまは明神川と唱ふと一説は此水
道は昔より大谷川の水を宇都宮城に引用水と一又
通船の便をふさんとして堀り水道をれもその
成らばしてやぬといふ是非は辨し

人參畑 右

村民丹左衛門持

熊野社 左

山神社 左

瀧尾社 左

以上三社村民持

地藏山 左

山上に地藏あり村民持

愛宕社 左

天王社 左

二社ともに山上より村民持

筋違橋

志と洲川に架け板橋長四間幅三間

志と洲川

一名水無川水源は鉢石山舟沢より流達出又観音寺

穢多町の徳多り

百間石垣 右

大谷川除の隈あり野口村七里村の辺より穢多町
右の方裏通り鉢石町入口の辺より長さ百間餘大
石を積り堤より名は多り百間石垣といふ

竹ヶ鼻 右

大谷川の向ふ所野山の下あり出崎をいふ此より
下ハ巖石少く上ハ芝生ありといふなる洪水あり損壞
せ及所野村の人民これより水災はまぬといふ
多り

稲荷社 右

鉢石宿の持土人いふ是は稲荷といふは大明神
のこゝろ此社の辺を西行房といふその故ハむろ西行
法師此地より日光山へ参りて多立ありといふ
名つゝいふ一説は稲荷町あり稲荷の後小大石あり
其折より西行ありといふ其実を問ふ西行の
帰るは稲荷町をいふ西行房の名をいふありといふ
此社辺に残まるといふ

龍河寺 右

所野村の内小あり天台宗日光妙道院の門徒あり

瑠璃山園知院と号し奉尊ハ不動大日辨財天の三躰
と安置凡

木落山 左

わうし此山の雜木を伐落せし故の名あり中腹は天
神の社あり松原町の持あり日光 清系備の時此
山は遠見番所は建し居

松原町

日光清神領寛政年前ハ山口新左衛門支配ありし
夫より日光奉行の支配する當町をむし日光
清山内本宮の辺より日光清用地とありし寛

永十八年當所へ移る

常法院 右

當山流修驗江戸青山鳳閣寺の配下蓮花石所
妙学院觸下奉尊不動傍小童子八躰あり當院ハ
かく清山内より日光清寛永十八年當所へ移る

道祖神 右

稲荷町の持あり

横町

尤右あり

十五堂 左

御幸町龍藏寺の持堂の側小察一字あり通四ヶ
町の持あり墓所ありひま火屋あり此辺より流出
泉あり志々洲川とあり

石屋町

日光御神所あり支配ハ松原町小かあり此町もむか
し御山内本宮の辺ありしは松原町と同時小移され
し

御幸町

日光御神領あり支配ハ松原町不同し此町もむか
し御山内中山通より新町と唱へし元和三年

御官御草創のとき諸事の御用を勤免又當町ハその
のみ御本坊の前ありし御祭礼のとき 神輿渡り勢
らありしありし慈眼大師 公辺小告しし町名
以御幸町と改められ寛永十年六月一日諸役免許
の儘状と與へら進令小御門主より書替ありし
後來御山内繁栄せしは寛永十八年御幸町と今
の地小移るは町内小入江喜言坊ありし高二拾石紙
願しは當町中山通よりありし時より本陣と改めり又家
傳の慈菓子楚和餅ハ 御官獻備小ありし常小御
用を勤るし

横町左

龍藏寺右

天台宗清山内妙道院の末瑞雲山正見院と号し本尊
ハ三尊の弥陀あり當寺より清幸町石屋町境の横
町今三畝萬靈塔のよりありあり寛文二
年今より今の地に移せりむりハ真言宗あり
ハ慈眼大師登山の時より改宗せりもハ免齋地り
ハ一ハ庵室あり龍藏坊といひハ後小寺号
と改
觀音堂

境内より慈覺大師の作立像長一尺五寸板東三
十三所の内第三十二番なり堂内ハ三十三躰の觀音
あり

金毘羅社

稻荷二社

辨財天祠

共ハ觀音堂のありハあり辨財天ハ惠心僧都の作り

愛宕社左

天王社左

二社もハ小塚山の上よりあり清幸町持

横町 右

稲荷町 小いりか

稲荷町 右

日光清神領の内御門跡領より日光奉行の支配あり
往古ハ皆成川村と号ス稲荷川の辺御山内瀧尾道飯
盛の枚佛岩のりりりり律院の前下川原よそいり土
民居住せり寛文二年六月洪水の時民居悉く流失
せり同三年當所小移りて稲荷町と改免東町五ヶ
町の一とあり今藪垣面よ居住を俗民家六軒も皆成川
村のうちありりり土地高きゆ急小水災をともすぬれ今

存在せり

稲荷社

稲荷町の伝あり別當多門寺當社建保二年の
勸請あり其由未ハ勝道上人より十七世の座主隆宣法橋
の命より村民高橋次郎平上京せり時り日頭上重り
りりり不審ありりり其夜の夢ハ稲荷素り告りりり
りり禁庭より渡の稲荷ありりり汝信仰ありりりり
昔ハ東よりりり託言ありりり帰國して當社を
勸請せり云治郎平り子孫高橋平十郎今小當所り
りり又社の北ハ西行戻りり石ありりりり西行法師日光

山僧中の智慧をとり見んとく此所まき赤くしは
日光権現とやくこれを知り玉い山内よ入進てはうみ
とく及び小童小化し手小録をもち西行よ出向ひま
木へのほまこれ西行はまきみく
猿の児とおまは早く木小のわ
小童
犬の中なる法師これ
とほ多あり西行汝は何方一行そく同小童
冬りえく夏枯草をかりよゆく
と答ふこれ何の草とく同童いそく湯身の聖智の人

つ那世ふ何多秘く知まき麦とく草なり汝知りのりまや
とく手を打く笑ひこれ西行おろろかかる賤しき小
童とく知恵しはき所これ山小入んかありま
とく此所より帰るもか故小西行戻くと名はく

磐裂神社

東町の惣徳をたり本地虚空藏菩薩勝道上人の作
別當の観音寺の塔頭寶藏坊あり社地よ住吉明神
の社あり

多門寺

天台宗日光淨直末香煙山瑞應院と号し本尊毘沙

門天子を安置當寺むつゝ、綿荷川の辺ふりて多
門坊と号し、小庵あり、寛文二年洪水の後當所
小後甲、享享三年より日光御座末とあり、その先
住せし地を今小多門坂といふ、律院あり、坂あり

金剛院

當山派修驗江戸青山戒定院の本尊尊五丈あり、
不動を別殿に安置あり

不動堂

綿荷社

金剛院持

鉢石宿 都賀郡

江戸より三十六里余今市宿より里日光御座の
内御所跡履往古の領主詳し、日光御座の
より六のり、寛文中より日光御座使番月々
交代し、支配せり、其後御目代山口新古門支配と
寛政年中より日光奉行の支配に属す、開慶の年
代も傳つ、鉢石村と号し、宝殿小地の辺より四郎
太郎山の辺小人家一二軒あり、散在せり、元和年中
御宮御座座の故より人民次第に移り、みくら比屋
の町より、正保年中より宿駅の故より人足世五

下掛樋より上鉢石町道幅せよ八折八埋樋少く
中鉢石町より白堀より

下鉢石町

大横町 右

八乙女町より八乙女六七人居住せり故あり

薬師堂 左

山上より弘法大師の作あり観音寺持

中鉢石町

寶珠院 右

観音寺の塔頭あり今廢地とあり境内観音堂

より弘法大師の作あり正観音を安曇天

疱瘡神天神の三社あり

宝藏坊 右

観音寺の塔頭あり境内は福荷社及び地藏堂

あり弘法大師の作あり

頼音坊 左

智藏坊 左

光圓坊 左

已上三坊は観音寺の塔頭あり今は廢地とあり

されも頼音坊の持ありといふ太子堂一宇今も存

寺

愛宕社 左

鉢石山の續より宿の持あり

観音寺 左

鉢石山の中腹より天台宗日光寺末鉢石山無
量壽院と号し本尊弥勒ハ惠心の作り當寺を
ハ真言宗少く弘法大師の開基なりそのち慈眼大
師登山の時より改宗ハ其時の住僧とハ退院せしめ
天台宗と改免日光の末なり

観音堂

山上より千手観音の像を安置し勝道上人の作
又弘法大師の作りとも云

上鉢石町

要害山 左

観音山のつりあり

稲荷社 左

宿の持あり

見目明神社 左

鉢石町木戸外神橋のつりあり本官別所持
本地釈迦如意輪垂迹属星荒浄前也

星宮 左

山上より本宮別所持大同三年勝道上人の造立
本地虚空藏菩薩より大白星の化身なり安立
とす所の天童の像なりいかに上人開山のとき山菅
橋のたもとふたをみし時童子とありし種々の奇
瑞ありし故其時の形を彫刻し當社小安置せり
又むろ源頼朝奥州の泰衡追討の時此社を祈願
ありしとす

星宿 左

星宮の西より清山内一坊の行者十二月廿六日星

宿勤行堂を出る二月下旬星宿より帰り三月二日
坊より帰る勤行の次第は日光山の記録よりしけ
るはたのむ教員せん

縮荷川 右

水源は赤柳山谷より流連出大谷川より會は平常
は水少くして川の中央を流連雨辺の河系は石の多
し夏秋の際霖雨の時洪水出く巨石を流し近辺の
人民水災小遇しより流末は四里程下針貝村より縮川
小會は

下乗石 左

神橋のこゝろのふりま

大谷川

石川より清流なり、巖石に激して流る音喧騒小
く其色玻璃のこゝろ水源ハ中禪寺湖水より出
華巖の瀧より久次郎村より含満淵を經る神
橋の下に過稲荷川よ合ふ

假橋

大谷川より板橋長さ拾貳間四尺幅二間三尺往
來の人馬を渡りて御山よ出入す

神橋

假橋のこゝろのふりま板橋長さ拾三間五尺六尺五寸を幅貳

間四尺貳寸朱塗より金の擬宝珠より其色水に映

てきこひやあり或ハ朱の御橋もいふ兩岸よ石の柱

あり前後小埜を設りて常人の往來を許さん

御糸清の時酒をらぶの外ハ一坊の行人下山の時

渡り事と許さんむら山菅の橋と名つゝ其由来ハ

天平神渡二年勝道上人日光山よ入りて此

川上よまうりて崖をいり谷深くして渡りて

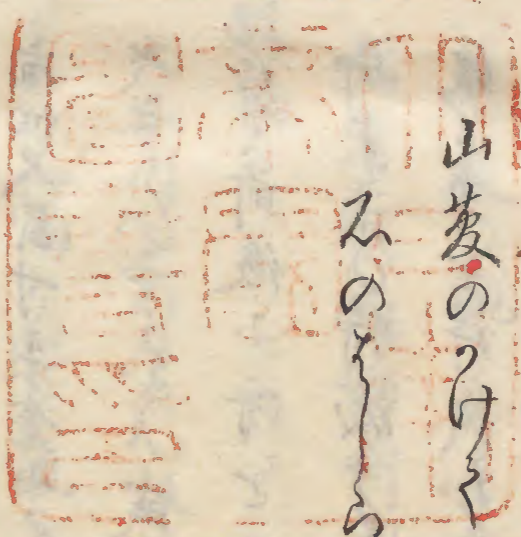
おれはさきの岸小舟をみりて志を中よりいりて深

砂大王よりいりて青赤の二蛇を敬りて橋もいりて

上人靈蛇の上坂のまんまをさるる草かゝ翁を
やゆき山管とてうをさしを蛇跡よわいしく渡らる
大同三年上人其跡に橋設作是山管の橋と名づく
三條實條郷詠歌なり

山管のつげのりやうき古橋と

ふのりうき渡り清代う那



日光道中畧記卷之八終

